くらしによりそう「すみつかれ」

板橋区立板橋第四小学校５年　矢﨑（やさき）　煌（ひかり）

ぼくは毎年冬に茨城のおばあちゃまが作ってくれる、「すみつかれ」という料理が好きなのですが、一年に何回も作るものではないようなので、気になりインターネットや本で調べてみました。

「すみつかれ」は、鬼おろし（竹製の目があらい大根おろし）という器具でおろした大根と人参、さけの頭、いった大豆、酒かす、油あげを煮込んだ料理で、栃木県を中心に、群馬県、埼玉県、茨城県など北関東地方や千葉県、福島県の一部で食べられています。

「すみつかれ」は、「しもつかれ」、「しみつかり」、「しみつかれ」等地いきでよび方が違うことがわかりました。2007年に農林水産省が行った「農林漁村の郷土料理百選」の栃木県の一品に選ばれています。

栃木県では、「しもつかれ」とよぶことが多いようですが（栃木県のホームページより）、言われは、鎌倉時代に食べられていた、いった大豆を酢につけた「酢むつかり」に由来するとか、旧れきの初午の時期（いまの三月五日ごろ）に豊作を願って下野国（しもつけのくに）の各家庭で作って食べるという家令（家訓）から「しもつかれい」となり、「しもつかれ」になったという説がありました。

ぼくは、母にたのみ茨城にいる母の友達にメールで質問させてもらいました。また、お盆におばあちゃまにインタビューをしました。母の友達に聴いたのは、１、この料理を何とよんでいるか、２、友達のお母さんはつくるか、３、材料は何か、です。

Ｉさんのお母さんは栃木県小山市の出身で、結婚して下館市（現在の筑西市）にきました。「すみつかれ」は作るのが大変なので自分では作りませんが、食べるのは大好きということでした。Ｎさんのお母さんは、茨城県結城市の人で、「すみつかれ」とよんでいました。材料は右に書いたのと同じで、毎年作っていたそうです。いった大豆は節分で残ったものを使います。むかしは七けん以上の家庭のを食べると健康でいられるという言い伝えがあり近所でおすそわけして食べあったそうです。Ｎさんの旦那さんのお母さんは茨城県下館市の人で、よび名も材料もＮさんのお母さんと同じでした。ぼくのおばあちゃまは茨城県つくば市の出身で、結婚後仕事の都合で下館にきました。よび方も材料もＮさんのお母さんたちと同じでした。作るのは初午の後で、むかしは豊作を願って神社におそなえするものだったと教えてくれました。おばあちゃまの母、ぼくのひいおばあちゃまは、「すみつかれ」とよんでいましたが、材料は大根、人参、いった大豆、油揚げだったそうです。それらを煮てしょう油と塩で味付けするので、さっぱり味だったとのことでした。おばあちゃまは、職場の人たちが持ちよったすみつかれの味見をして、そこで初めてさけや酒かすが入っていることを知りました。材料だけ、塩やしょう油、酢を入れるなど、家庭により味に違いはありますが、さけと酒かすによりこくやまろやかさがあったので、それからおばあちゃまはこの材料も入れて作るようになりました。職場の人たちがすみつかれを持ちよったときに、七けん以上の家庭のものを食べると中風（まひ等ののうの病気の後いしょう）にならないという言い伝えも聞いたそうです。

メールの質問とインタビューから、茨城県の県南、県西地区では、「すみつかれ」とよぶことが多いこと、地域の違いなのか世代の違いなのか、材料に違いがあることがわかりました。そこでぼくは、すみつかれの材料になっている野菜や大豆などが日本に入ってきた時期や、一ぱんの人が手に入れられるようになった時期を調べることにしました（表）。

大豆や酢は、奈良時代には貴族やお金持ちは手に入れられたようなので、「酢むつかり」は、そ

うした限られた人たちが食べていたものなのかと考えました。大豆は鎌倉時代には日本で栽培され、酢が広がったのは江戸時代のようです。大根が広く栽培されるようになったのは江戸時代で、油揚げのもとの豆ふは江戸時代中期に広がったことがわかりました。ぼくたちがいま食べている人参は西洋人参で、それは江戸時代後期に普及しました。酒をしぼって残る酒かすがたくさん売られるようになったのも江戸時代で、これらを考えると、江戸時代の後期にはすみつかれに使う材料はそろえることができたようです。しもつかれについてとり上げた、松本（2002）の『ある郷土料理の一〇〇〇年』によると、いった大豆を酢につけ、そこに大根おろしを入れて食べる「スムツカリ料理」が、しょう油の普及によって煮るようになったのではないかと書かれていました。煮るようになって、生では食べにくい材料も加えられるようになったとすると、しょう油の普及にともなって、さけ、酒かす、油揚げも入れるようになったと考えられます。人参の普及の時期も考えると、ぼくが食べている「すみつかれ」は、江戸後期から、旧暦が使われていた明治になる少し前には食べられていた可能性があること、また、作るのは節分の後、初午の頃であることもわかりました。豊作や無病を願ったり、残りものを大事にするなど、郷土料理には色々な思いがつまっていることを知ることができました。

表　すみつかれの材料の渡来・普及の時期

	縄文	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	明治
大豆		△古事記に記載		○栽培			
大根		△古事記に記載 大根一把と米一升が 同じ値段だった（高級）	△貴族の間 に普及（租物）			○全国的に栽培	
人参						△西洋人参が 日本に渡来	○江戸後期に普及
サケ（鮭）	△アイヌの人々など が、食べていた					○養殖が始まった	
酒かす			△万葉集に酒かすを水に溶かして 温めたものについて書かれている			○酒かすを売る人が 増えた	
油揚げ							○豆腐が江戸中期に 日本人の生活に根づいた
酢		△中国から 渡来	△上流社会の高級調味料			○普及	
醤油					△当時の国語辞典 に醤油の記録あり 西日本、九州に普及	△江戸時代の初期でも関東には、 普及していなかった	

△：一部の人が食べていた
○：一般の人も食べるようになっていた

参考文献
・松本忠久（2002）「ある郷土料理の1000年」文芸社

参考ホームページ
・江崎グリコ株式会社
・日本豆腐協会
・野菜ナビ
・マルハニチログループ
・新潟県村上市
・西日本旅客鉄道株式会社

地域における祭事とその変化

逗子開成中学校３年　比企（ひき）　能悠（よしはる）

神奈川県平塚市は、私の故郷である。県内一の米どころであり、私の先祖も農家であった。特に私が住む地域は古くからの友人関係を共有しており、昔からの慣習として興味深い行事や祭事を多く今に残している。

今回は私の地域における祝い事、そして祭事などを図書館で調べたり祖父母に話しを聞いてまとめることにした。

まず、特徴的な祝い事として「稲荷講」と「庚申講」というものがある。

「講」というのは、近所に住む五～六軒の家が集まって作る一つのコミュニティーである。私の祖父は「稲荷講」と「庚申講」に属しており、特に稲荷講はかつて三～四つあったのが今は一つのみと伝えられている。

稲荷講は、江戸時代から存在したとされており農民の楽しみの一つであった。お稲荷様に鰯と酒の供え物をし、祀ることでそれぞれ家内安全と健康を祈願したとされる。

また、稲荷講は当番制で毎年担当する家が変わった。江戸時代から受け継がれる祭りに使用する旗と掛け軸は今も講に属する家々を転々としている。

では、稲荷講のその実態はどのような物だったのかと現在の状況をまとめていく。

かつては、祭りの当日に当番の家に旗と掛け軸が飾られ、一軒から一人が米一升と酒代、茶菓子代の分担代金を持ち寄った。当番の家では赤飯や寿司、けんちん汁、刺身、吸物、酢の物、煮〆などのご馳走を用意して宴会を開き、参加者はご馳走を重箱につめて持ち帰った。ただ、食事と宴会の準備を主体となって行うその家の嫁には負担が大きく、次第に嫌われるようになる。

現在では、先述した通り嫁からの反感やどうせ「飲み講」なら外に出かけた方が良い、という考えから名前だけ残った一種の儀式になっている。

この稲荷講は今、私の祖父の世代が引き継いでいる。ただ、私の父の世代や私の世代、そしてその先の世代まで講が続くかと言えば、地域や家族と家族のつながりが弱まった現代においてとても難しいことだと言える。

「庚申講」についても同じことが言える。

庚申講は年二回、農閑期に行われ、掛け軸を飾り、庚申に対してそばと酒を供える。

これに関してもこれから先、どのように変化していくか見届ける必要があると考える。

つぎに、特徴的な祭事について述べようと思う。

私の家の目と鼻の先にある徳延神社は、今でこそ地域の名前を付けられているが、かつては雷電社と呼ばれていた。

雷電社では昔、四月十三日に大きな祭りがあった。テレビや漫画などの娯楽が無かった当時は、神社の祭りが一つの楽しみとして存在していた。

祭りの日は皆座布団を持って境内に入り、そこで行われる田舎芝居に熱狂していた。

田舎芝居は今でいう歌舞伎のことで、昔は多くの神社で見ることができた。特に雷電社の芝居はとても良いと評判で、他の地域からも参加者が来たとされている。

今は日曜に片付けができるようにと、祭りは四月の第三土曜日に設定されている。昔のような活気は少なくなってしまい、数店の屋台が出ているのみになっている。

テレビや漫画など文明の急な発達が、文化を潰してしまったのだと思うと悲しくなる。

これまで、地域の祝い事と祭事をまとめてきた。

私がこの作文を書くにあたって、祖父母に昔のことを取材したのだが、祖父母とも嬉しそうに多くを語ってくれた。

現代に暮らす人は自分の生まれやルーツ、地域に興味を示す人が少ない。だが、一度調べ始めてみると驚くような発見が待っていることもある。

縁切榎　ー心の声のよりどころー

板橋区立板橋第一小学校６年　小澤（おざわ）　慶騎（よしき）

縁切りの御利益があることで有名で、よくテレビでも取りあげられ、「板橋へ三行半の礼詣り」という川柳や、落語の名人三遊亭圓朝原作の「縁切り榎木」のモデルとなった板橋区の史跡「縁切榎」の真横で僕の家は五十年近く日本そば屋をしているが、「縁切榎」を守る為の奉賛会の仕事の一つとしてボランティアで絵馬を預かり、全国から来る参拝者に販売している。参拝者はその絵馬に縁切り祈願を書き、「縁切榎」に奉納していく。1794（寛政６）年に作成された「四神地名録」という書物の下板橋駅の紹介文が縁切榎に絵馬が奉納されていたことがわかる最も古い記録とされているが、今では平日の少ない日で一日十枚近く－夏休みや連休の日には一日に五十枚近く売れることもある。

「縁切榎」には老若男女、幅広い年代の人が時間を問わず訪れる。毎月１日と15日に欠かさず参拝に来る人もいれば、中には北海道や九州から飛行機や新幹線を使って来る人もいる。それだけ多くの人から信仰されている証拠だ。でも僕は世の中の誰よりも近くに住みながら「縁切榎」について興味がなかった。ところが、歴史の授業で「公武合体」を学んでいた時に、実は「縁切榎」が江戸幕府に大きな影響を与えていたことを偶然知り、急に興味が湧いてきて、奉賛会の仕事を何十年もしてきて朝昼晩一日三回境内の掃除をし、町で一番「縁切榎」に詳しい祖父にその歴史をたずねてみることにした。

そもそも「縁切榎」はいつからあったのか。祖父の話をまとめると、江戸時代、現在の場所から少し斜め前の今は美容室となっている場所に近藤登之介という旗本の屋敷があった。その屋敷の垣根の近くに榎があり、そのそばに「榎大六天神」が祀られていて榎は御神木として大切に扱われてきた。「大六天神」は、仏教の修行を妨害する天魔とされ、その強力な魔力は縁切りにも影響を及ぼすと言い伝えられ、いつしか「男女の悪縁を切りたい時や断酒を願う時、榎から削ぎ取った樹皮を煎じて相手に飲ませば願いが成就する」と評判になり、その噂が瞬く間に江戸中に広まり榎は「縁切榎」と呼ばれるようになった。何故そんなに広まったかというと、そこには江戸時代の女性が今みたいに自分から離縁することができなかった背景がある。どんなに夫から酷い仕打ちを受けても耐え続けるか幕府から認定された縁切寺で尼さんになるしか助かる方法がなく、彼女達には幸せも自由もなかった。「縁切榎」は、そんな彼女達の救世主だったのだ。そしてその評判は江戸幕府の耳にまで届いていたというから驚きだ。「榎の下を嫁入り婿入りの行列が通ると不縁になる」と江戸中で信じられていた為、1861（文久元）年、「公武合体」で皇女和宮が将軍家茂に嫁ぐ時に板橋宿から江戸に入る段階で、この伝説を封じようと和宮の行列が榎の下を通らないよう地元の人々は榎を避けた迂回路を一キロも作り行列はそこを通って行った。江戸幕府をも恐れさせたこの一件で、益々人々は「縁切榎」の力を信じたというのもわかる気がする。その初代の榎は1884（明治17）年に板橋大火で焼失してしまい、その後二代目が植えられた。

ここまでは文献にも残っているが、「縁切榎」に消滅の危機があったことを知っている人は少ない。「縁切榎の生き字引」の祖父の話では1972（昭和47）年に町の再開発が始まると当時「縁切榎」を管理していた人物が事情により管理を手放した結果、二代目の榎は伐採されたまま暫く無残な形で放置され、町から排除される寸前だったそうだ。

「長い間剪定もされず雑草だらけの中で榎は伸びすぎ荒れ放題で昼間でも薄暗く見ていて物悲しい光景だった」

と祖父はその時の様子を語ってくれた。そしてそんな状況を見かねた町の人達が、
「長い間ずっと町を守ってきた神様でもある縁切榎をいつまでも粗末にしておくのは良くない。今でも縁切榎を信じ祈願に訪れる人が大勢いる。町の未来の為にも参拝者の為にも管理する人がいないなら自分達で縁切榎を守ろう!」
と「縁切榎」保存の為の運動を起こした。現在の地に植えられた三代目の「縁切榎」にはそんなドラマがあったのだ。
　今は初代の木片と二代目の木片は祠の中に納められ、保存の為にモルタルで固めている二代目の榎の一部には「樹皮を削り、非道な相手に煎じて飲ますと不思議に縁が切れる」と信じられていたので、樹木を抉り削り取った跡がたくさん残っている。その二代目に触れながら泣いている人を僕は見たことがある。大きくそそり立つ三代目の榎は保護保存目的で削られないように幹の周囲を竹でカバーしているが、
「それでも竹の隙間を見つけ削っていく人が後を絶たない。それだけみんな悩みを抱えているんだよ」
と祖父は静かに語ってくれた。
　また悩みの種類も時代とともに変わり現代では男女の悪縁や断酒だけでなくストーカー、パワハラ、いじめ、病気等の「悪縁切り」に効果があり逆に「良縁は切れない」という信仰になり、悩みの多さや複雑化に比例するように参拝者の数も日に日に増えているという。
　僕が「縁切榎」について調べていると、
「私が子供の頃の縁切榎は今の殺風景な雰囲気と違い周囲に花が植えられ、子供達からは『縁切りさん』と親しまれ、かくれんぼをしたりおままごとをする遊び場だった」
と母が教えてくれた。今は全くそんな面影は無い。けれど昔も今も「縁切榎」は困っている人の救世主なのは変わらない。
　僕は祖父にたずねたり調べたりするまでは、家の目の前の、知らない人なら気づかずに通りすぎてしまうぐらい小さい境内も五人も入ればいっぱいになってしまう「縁切榎」が江戸時代から多くの人達を救ってきた神様だったことを知らなかった。だから何故全国から人々が毎日訪れるのか不思議で仕方なかった。
　でも今は違う。
　ここに参拝に来る人はみんな誰にも言えない苦しみや悲しみや辛さを抱えてやってくることを知った。藁をも掴む想いで祈願していることも知った。祖父の口癖である
「縁切榎はいつだって悩んでいる人の願いを受けとめてきた」
という意味もわかった。
　だから僕は
「縁切榎は人に言えない心の声のよりどころ。これからも命ある限り守るよ」
と言った後に誇らしげに笑う祖父と一緒に境内の掃除をしようと思う、「縁切榎」を多くの人の心の支えとして大切に後世へ残していく為に。そしていつか僕が祖父の後継者として「縁切榎」を守っていきたい。

板橋区の井戸の歴史について
～昔、今、そしてこれからの水とのつき合い方～

板橋区立緑小学校４年　大久保（おおくぼ）　結史（ゆみ）

私は、６月に学校で水道キャラバンの授業を受けました。キャラバン隊の人たちが、浄水場について説明をしてくれました。現在の生活では、水道がなくてはなりませんが、昔の水道がない時代は、どうやって水を使っていたのか、調べてみようと思いました。

おじいちゃんの生まれた家は、板橋区前野町にあります。前からそこには井戸があると聞いていたので、おじいちゃんと、見に行くことにしました。

その家には、まだ井戸がありました。今でも井戸の水を畑の水やりや、庭の水まきに使っています。想像していたポンプ井戸とはちがい、石せいの井戸の上には、木でふたがされていて黒い木の箱がありました。箱の中にはモーターが入っていて、水をくみあげ、水道管を通り、じゃ口から出ます。その水はつめたかったです。

おじいちゃんの小学生ぐらいの時まで、ポンプ井戸で、井戸水をそのまま飲んだり、生活用水として使用していました。おじいちゃんが中学生のころ、保健所のけんさが必要となりました。けんさ結果は、飲み水としては不合格だったそうです。畑や草花には使えるので、その時から現在まで使われています。井戸をよく観察したくてそばへ行くと、なぜか蚊がたくさんよってきました。井戸とふたの間に少しすき間があるから、蚊が発生するのかなと思いました。

井戸についてくわしく知りたくなり、赤塚にある板橋区立郷土資料館に行ってみました。しょく員の人に、井戸について聞いてみました。まず、初めに、中庭の井戸を見せてくれました。その井戸は、おじいちゃんの生まれた家の井戸とちがい、車井戸でした。車井戸は、つるべおとしがあり、つるべおとしにロープをつって、両はじにおけをぶらさげているもので、柱があり、かやぶき屋根をささえていました。深さは何十メートルもあり、わき水と、荒川の水がでてくるのだそうですが、今は、もうコンクリートで固められています。その井戸は、近くの家から運んできて設置したそうです。

車井戸が定着したのは、日本では江戸時代に入ってからのようです。集落に一つしかなく、一つの井戸をみんなで使っていました。明治の半ばすぎから、内井戸の普及とあわせポンプ井戸は一般家庭にも広く重宝されるようになりました。そしてそれが、手押しから電動に変身したのは大正７年のことです。

車井戸は、おけを井戸の底に落としただけでは、おけはういていて水が入らないので、落とし方、縄の使い方にコツが必要でしたが、手押しポンプは、車井戸の水の汲み方にくらべると、子供でもそうさができるようになりました。

そして、私のなぞはもう一つでてきました。それは、井戸の前はどうやって水を運んでいたのだろうかということです。荒川まで行って水を運んでいたのですかと聞いてみると、昔板橋には、小さな川から水を運んでいたのよ、と教えてくれました。板橋の川の変化を調べてみるとその小さな川は、出井川だと分かりました。出井川はその水源が志村三泉のひとつである、出井の泉によるところから名付けられたそうです。板橋地方にとっては母なる川の一つでした。地図を見ると、私の家の近くの志村第四中学校の後ろの赤い道も出井川でした。その川は、高速道路の下を通り、見次公園を通り、ときわ台の花岡耳鼻科の横まで続いていました。今ではその川は、生活道路になったり、川としては管理されておらず、下水道の扱いです。昔は出井川は、整備されていないため、よ

くはんらんして、近くの人々は困ったそうです。

私は、井戸について調べてみて、昔から人々の生活には、水はなくてはならないものだから井戸が作られたのだと分かりました。

東日本大震災の時、断水になり、とてもこまった地方がありました。おふろの残り湯をすてていたら大変なことになったと、言っている人がいたと、母から聞かされました。水をためておくことは、断水の時に役立ちます。今はどこの家庭でも水道があるため、井戸は必要ありません。ひなん訓練の時にいつも校長先生が、

「東京にも三十年の間にまた、大きな災害がおこります。」

と、話してくださいます。私は今ある井戸を新しい家や、マンションを建てるからといってすぐにこわすのではなく、その井戸を活かした建物を建てるなどの工夫をしたらいいのになと思いました。

今年の７月には、広島、岡山でごう雨による土砂災害、しん水害がおこりました。テレビで見る映像は、家や木が流されていて信じられない様子でした。水は、私たちにはとても大切な物ですが、時に私たちの生活をおびやかす物に変化します。なのでこれから上手に水とつき合える社会にしようと私は考えました。

【おじいちゃんの生まれた家の井戸】